

プロジェクト学習「歴史プロジェクト」実践報告

榎 本 幸 一 (地歴公民科)

要 旨

本報告は、2021年度、本校58期(第2学年)で行われたプロジェクト学習における「歴史プロジェクト」の実践報告である。生徒が自ら問いを立て、史料を探し、答えを探るという探究活動の一連の流れを経験することを目的にレポート作成に取り組んだ。結果として、作成したレポートが「第25回 図書館を使った調べる学習コンクール(全国大会)」で優良賞を受賞することができた。活動の概要や活動を通してスケジュール管理や、活動をオンラインで行う上で生徒のモチベーション維持などの課題が得られた。

1. はじめに

(1)「歴史プロジェクト」とは

はじめに、「歴史プロジェクト」とは何か、活動の概要を述べていく。58期では、プロジェクト学習と称して、生徒が自らの興味に応じたテーマについて1年間を通して探究活動を行っている。2021年度は、「グローバルプロジェクト」「台湾プロジェクト」「阪神・淡路プロジェクト」「ビジコンプロジェクト」「コンサートプロジェクト」「ボランティアプロジェクト」「日商簿記プロジェクト」「理数探究プロジェクト」「模擬国連プロジェクト」「模擬裁判プロジェクト」「日経ストックリーグプロジェクト」の計12のプロジェクトが立ち上がり活動を行った。この内、「歴史プロジェクト」発足の経緯を説明する。この

プロジェクトは当初想定されていなかったが、歴史に興味を持つ生徒が学年主任に直談判し、自作のチラシをクラス掲示し、発足に向けて動き出した。58期の日本史の授業を担当する著者が担当になり、実際の生徒の希望調査では、予想以上の生徒が希望を出し、計11名で発足することとなった。

プロジェクト学習の時間は、LHRの時間の一部を活用して行われ、プロジェクトによっては、放課後や長期休みを活用して探究を深めた。歴史プロジェクトでは、夏休みを使って「全国高校生歴史フォーラム」並びに「図書館を使った調べる学習コンクール」に出品するレポート作成を行った。しかし、当時は緊急事態宣言下であり、対面で集まる活動は十分にできなかったため、Google ClassroomやGoogle Meetを活用してオンライン上での活動を中心に行った。

(2) 各種大会について

今回の活動で参加した各種大会について概要を説明する。まず、「全国高校生歴史フォーラム」とは、“暗記じゃない歴史がここにある”をスローガンに奈良大学と奈良県が主催で行っている大会である。全国の地理歴史系の部活動が入賞を目指す大会であり、今年で15回目の開催となっている。次に、「図書館を使った調べる学習コンクール」についてである。この大会は、歴史に限らず「調べる学習」を通じて、図書館の持つ力を活用し、体験や創作などと結び付いた実践的研究を発表する場となっている。各地域で予選にあたる地域コンクールを行っており、地域コンクールで入賞すると全国大会に出品される。(自身で直接全国大会に出品することも可能。)

両大会とも、自ら設定した課題について調べ、考察し、探究した研究成果を発表する場となっており、来年度から始まる総合的な探究の時間においても活用できるのではないかと考える。

2. 実践報告

本章では、歴史プロジェクトの実際に行った活動を報告する。まず、歴史プロジェクトでの活動の概要を説明する。本活動は以下のスケジュールで活動をした。以下のⅠ～Ⅲのそれぞれについて、活動内容を述べていく。

Ⅰ 事前学習 4～5月(LHR2回分)

Ⅱ 調査活動・レポート執筆 6～9月(放課後、長期休み中に有志による活動)

Ⅲ 振り返り 10月(LHR1回分)

Ⅰ 事前学習(活動期間：LHR2回分)

事前学習では、史料を読み取り、史料から歴史的な事象を考察する体験を行った。本プロジェクトの生徒達は、昨年、1年次の「地歴基礎」の授業で中学生までに学ぶ基礎的な歴史事項を知識として獲得している一方で、実際の史料を読んだり、史料から考えたりする日本史の授業は第2学年で勉強を始めたばかりである。まだ「身近な疑問や課題を歴史的に考察しよう」といっても、やり方が分からず、深い部分まで考察しきれないと考え、事前学習としてワークシートを用いた史料の読み取りを行った。具体的には、「近衛文麿」と「荻外荘」について、史料からその人間像や果たした役割について考えるという学習活動である。近衛文麿と荻外荘をテーマに選んだのは、あらかじめ生徒から歴史プロジェクトでやってみたいことを聞いたところ「近隣の史跡である荻外荘について、授業で学ぶ機会がないのはもったいないので学んでみたい」という声があったからである。以下に事前学習で用いたワークシートを示しながら実践例を紹介する。

活動第1回目

5月26日、LHRの時間を使用してプロジェクト学習初回の活動が行われた。資料1は、初回の活動でアイスブレイクを兼ねて使用したワークシートである。活動内容は以下の通りである。

- ①歴史を学ぶ意義、歴史プロジェクトを選んだ理由についてペアで考えを共有。
- ②歴史と史料について史料が持つ役割や、史料の捉え方などについて学習。
- ③身近な題材を使って歴史を探究する。

まず、初対面の生徒達であったので、①で各々の歴史に対する思いを語ってもらった。著者顔負けの歴史好きが集まったことを強く感じた。②では、歴史探究の一連のやり方・流れを講義した後、探究において欠かせない史料についてその役割を学んだ。史料批判の重要性や、史料を様々な観点から読むことの大切さを理解した。最後に、身近な題材である杉並区の史跡、荻外荘に関連して近衛文麿について史料を使って人物像を探った。教科書でどのように近衛文麿が語られているかを学んだ後に、杉並区教育委員会が2021年3月に発行したばかりの『近衛文麿内閣関係者が語る諸家追憶談』を使って近衛文麿のリアルな人物像を探るという活動である。この本は、戦後まもなく近衛と近い人物に行われた取材を書き起こしたもので、その原文が掲載されている。元々、荻外荘にあった資料をまとめ刊行されたものである。この本や荻外荘について関心を寄せ、著者に話をしてくれたのも生徒であり、生徒の話を聞いた後、急ぎ荻外荘に向かいいくつかの資料を集め、プロジェクトの活動に使えるものを検討した。恥ずかしながら、著者は杉並区に引っ越したばかりで地域の史跡については無知であったので生徒に教わりながら著者自身も学ばせてもらった。

資料1

プロジェクト学習「歴史探求」NO1～歴史と史料～

1あなたにとって歴史とは

Question①歴史を学ぶ意味をどのように考えますか？なぜ歴史探求を選択したのですか？

自分の考え

友人の考え

2史料が歴史を明らかにする

○史料を分析すると歴史の真実が見えてくる

【歴史研究の基本】 ①史料の収集 → ②史料の読解 → ③史料の分析(=史料批判)

- ・教科書に書いてある歴史はどのように作られるのだろうか
- ・教科書に書いてあることは100%正しいのか？
- ・今の教科書と昔の教科書

→ 実際に史料を読んで教科書に書いていない歴史の一端をのぞいてみよう

3身近にある歴史「荻外荘と近衛文麿」

荻外荘

.....近衛文麿旧宅。内閣総理大臣を3度務めた政治家・近衛文麿が、昭和12年の第一次内閣期から20年12月の自決に至る期間を過ごし、昭和前期の政治の転換点となる重要な会議を数多く行った場所

近衛文麿

.....昭和12年第1次内閣を組閣。同年7月の盧溝橋事件を契機に日中全面戦争へ突入、以後3次にわたり首相を務めた。15年大政翼賛会設立、日独伊三国同盟締結。戦後、A級戦犯の容疑者として、逮捕直前に自殺。

◎課題「近衛文麿に関する実際の史料を読み、教科書(学校)で学ぶ近衛文麿像との差異やより鮮明な人物像を探ろう」

- ・使用する史料『近衛文麿内閣関係者が語る 諸家追憶談』編集 杉並区教育委員会



活動第2回目

6月9日、初回と同様にLHRの時間を使用して第2回目の活動が行われた。

資料2は2回目の活動「荻外荘会談から日米開戦への経緯を読み解く」で使用したワークシートである。活動内容は以下の通りである。

- ①事前知識として日中戦争・太平洋戦争と日本について簡単に講義
- ②身近な史跡である荻外荘が日米開戦に関する重要な会議が行われた場であることを知る。
- ③荻外荘会談の史料を読み、日米開戦までの軍の詳細なやり取りを紐解く。

近衛文麿と荻外荘について学んだ上で、荻外荘会談に関する史料を実際に読み取る活動を行った。まず、荻外荘会談当時の日本と世界の状況を知るために、日中戦争、太平洋戦争に関する講義を行い事前知識を獲得した。その後、日米開戦に至る経緯を考え、荻外荘会談という日米開戦に大きな影響を与えた会談が荻外荘という身近な場所で行われていたことを知り、荻外荘会談の実際の史料から日米開戦の経緯を読み取るという活動である。時間の関係もあり、史料はなるべく読みやすいものを用意し、昔の史料が読めるようになる練習ではなく、読み取ったことから考える体験ができることを大切にしたい。今回の活動では、教員が課題や資料を全て用意した上での活動にはなってしまうものの、知識を獲得し、そこから課題(問い)を設定し、その答えを史料の読解から探っていくという探究の一連の流れを体験できたのではないかと考える。

公園の前を通り登校するが、原っぱ公園にある記念碑に目を向け、その歴史を考えたことがある生徒は多くないだろう。歴史プロジェクトの生徒も中島飛行機について詳しく知る者はいなかった。かくいう著者も、本年度から本校に勤務し、原っぱ公園と中島飛行機の歴史については無知であったため、生徒と共に図書館で資料を集め、本を読み勉強することとなった。

調査活動のスタートは本校図書室で始まった。夏休みに入る直前の放課後にメンバーで図書館に集まった。本校の図書室は大学の付属校ということもあり、豊富な資料が揃っている。『杉並区史』(1955)や『平和を願って―区民の戦争・戦災体験集―』(1993)のように、地域の詳細な歴史を調べたり、戦争体験の生の声を感じたりすることのできる貴重な本があり、生徒達は指示するまでもなく自分達で中島飛行機に関連する本を探し出し、読み漁っていた。著者はいくつかの本を紹介し、図書室に無かったものに関しては、地域の図書館を活用するように伝えた。図書館へは生徒たちが分担し、下校途中に本を借りに行った。まずは中島飛行機を知ることからのスタートであった。生徒には「文献メモ」と称したワークシートを配り各々担当の本を読み要約し、疑問点をメンバーに共有する課題を出した。レポート執筆のために使用した参考文献を以下に示したい。

- ・『杉並区史』(1955)東京都杉並区編集・発行
- ・『平和を願って―区民の戦争・戦災体験集―』(1993) 杉並区総務部総務課編集・発行
- ・『戦後 70 周年記念事業 区民の戦争戦災証言記録集』(2016)杉並区区民生活部管理課編集・発行
- ・『中島飛行機の研究』(1988)高橋泰隆著 日本経済評論社発行
- ・『歴史のなかの中島飛行機』(2017)桂木洋二著 グランプリ出版発行
- ・『戦時下の武蔵野 1 中島飛行機武蔵製作所への空襲を探る』(2011)牛田守彦著 ぶんしん出版発行

- ・『徹底図解 零戦のしくみ―日本航空史に燦然と輝く名機の栄光と悲しき末期』(2021)矢吹明紀、市ヶ谷ハジメ、嶋田康宏著 新星出版社
- ・『卒業生のICU40年』 国際基督教大学同窓会編(1992)国際基督教大学同窓会著
- ・「発展する中島飛行機―証言集―」
<https://www.suginamigaku.org/2010/11/nakajima-hikoki-1.html>
- ・「内田秀五郎の思いを知る、初秋のまち歩き」
<https://www.suginamigaku.org/2019/10/utida-hidegorou.html>

上記の内、『卒業生のICU40年』については、生徒の保護者にご協力いただきお借りした本である。(国際基督教大学の敷地は、かつて中島飛行機三鷹研究所が立っていた土地であり、現在も史跡が残されている。)また、本の選定については、杉並区がHPで公開している中島飛行機の関連書籍を参考にした。また、中島飛行機に関連する史跡が地域にいくつかあるため実際に現地に行き、中島飛行機の跡地が現在どのようになっているのかを確認した。資料3・4・5はそれぞれ中島日江井関連施設の跡地である。

資料3(下記左)日産東京販売株式会社荻窪店に残される石碑

資料4(下記右) 武蔵野中央公園に設置されている説明版



資料5 日産東京販売株式会社荻窪店に残される石碑とプロジェクトメンバー



次に、中島飛行機に関して自分たちで問いを立てる活動を行った。いくつか読んだ本の中で気になることを共有したり、疑問に思ったことを共有し、レポートの方向性を考えた。ここでは、「杉並区の住民にとってどのような存在であったのか」という問いを立てた。詳細に述べると、中島飛行機は零戦のエンジンを作る軍事工場であるため、戦争中、空襲の標的になりやすいので、住民からは懸念の対象となる存在、嫌な存在だったのではないだろうか、自分の家の近くに軍事工場があったら嫌でないかという仮説を立てて、仮説が正しいかを検証していくことになった。資料を集め、読解していくうちに、この仮説は外れていることが分かり、むしろ中島飛行機が地域に誘致されたことで、雇用の創出・高給による労働者の生活向上・街の活性化などのメリットが多くあることが分かった。詳しくは探究マップを用いて後述する。

夏休み期間中の活動

緊急事態宣言中の活動で、長期休みの間は対面での活動が制限されたこともあり、レポート作成、中間報告、今後の方針の打ち合わせ等は基本Google MeetやGoogleドキュメントを使用し、オンライン上で行った。Google Meetはビデオ会議ツールであり、生徒は自宅から参加しレポート執筆の進捗状況を報告したり、読んだ資料の内容を報告しメンバーと共有したりした。また、著者からの指示や連絡も基本的にはオンライン上で行った。資料6はGoogleドキュ

メントを通じて生徒が作成した文章に著者がコメントを入れている例である。Googleドキュメントの共同編集機能を用いて、生徒はグループで1枚のドキュメントに自由に書き込むことができ、その様子をメンバーも確認することができる。随時、著者がコメントを入れ、レポート作成を進めていった。

資料6 Googleドキュメントで生徒作成の文章に著者がコメントする図

空襲と中島飛行機
ここでは中島飛行機工場と空襲について杉並区史、戦争被災証言記録集、発展する中島飛行機証言などの資料を参考に考えまとめていきたいと思う。空襲は杉並区民にどのような影響を与えたのだろうか。

そもそも杉並区民の空襲被害はどのようなものだったのか、まずはそこから考えていきたいと思う。杉並区は昭和19年11月24日から昭和20年8月30日の間に計18回に渡り空襲の被害を受けており、昭和20年6月19日までの空襲までの死者は181人、負傷者は3611人となっている。主な被災地域は高円寺周辺、永福町駅周辺、方南町駅周辺であった。(詳しくは下記の資料1を参照していただきたい)昭和19年の11月より空襲が本格化したことにより国から国民学校授業短縮が命じられるも学校教育は続いていた。しかし20年に入ると空襲による学校の被害が増加する。実際、昭和20年5月の空襲では杉並第三、第六、第十、西田、新泉、堀之内、和田、方南国民学校が全焼。杉並第一、杉並第七国民学校が半焼。板井第五国民学校の一部が破壊されており、戦時下における教育は度重なる空襲と疎開によって痛手を受けた。では他の区はどうなっていたのだろうか。東京に対する空襲は19年11月24日から終戦まで122回に及んでおり、特に昭和20年3月9日深夜から10日にかけての大空襲は、全壊家屋約26万7,000戸、死者約4,000人に及んだとされている。昭和20年6月19日までの死者は32,778人、負傷者は150,948人となっている。最も被害が出た地域を上から順にあげると、本所、深川、浅草と並んでおり死者・負傷者は順に26,960・24,601人、22,729・20,763、14,049・14,554人にもなる。杉並区の隣に位置する中野区の死者・負傷者数は、423・1703人と記録されている。これらと比べると杉並区の人的被害は他の区よりも少なかったことがわかる。また、被災地域も杉並区の西側の方に集中していることもわかる。しかし、たくさんの方が学校が全壊又は被害を受けていることから、死者数・負傷者が少なくても教育という面では痛手を受けたということが想像できる。

資料からみる杉並区民の空襲被害を知ることができた。では、次に空襲を受けた杉並区民から見る空襲はどのようなものだったのかを『戦後70周年事業 区民の戦争被災証言記録集 第3巻杉並の空襲体験』の証言から考えていきたい。岡崎幸子さんは以下のような証言を残している。『7月の月曜日の午後3時10分には、高井戸の家の前に、空襲被害にあった下町

原幸一
2021/08/20
表記は昭和19年11月24日という書き方で統一しましょう。

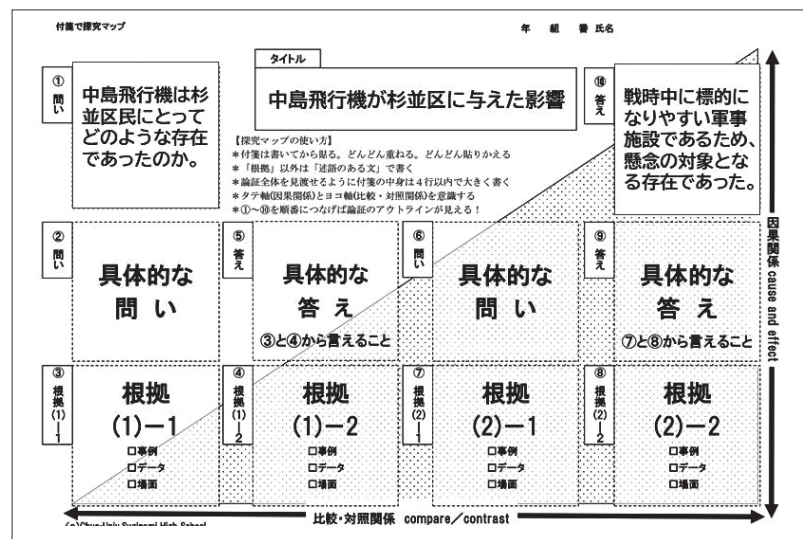
原幸一
2021/08/20
資料1の地図は資料の説明を付け加えて出典を明らかにしよう。例：杉並区が作成した杉並区空襲関連地図によると～の。のような形。主な被災地域があれば、杉並区史に載っているから地図を出さなくてもいいかな。検討してみてください。

原幸一
2021/08/20
他の区の話に変わるので、段落変更してもいいかな。その後加わる文章量によって検討してみてください。他の区の話はどこに載っていたのかな？これも杉並区史に載っていたのであればそのままで大丈夫です。他の冊を参考にしたのであれば明記しましょう。

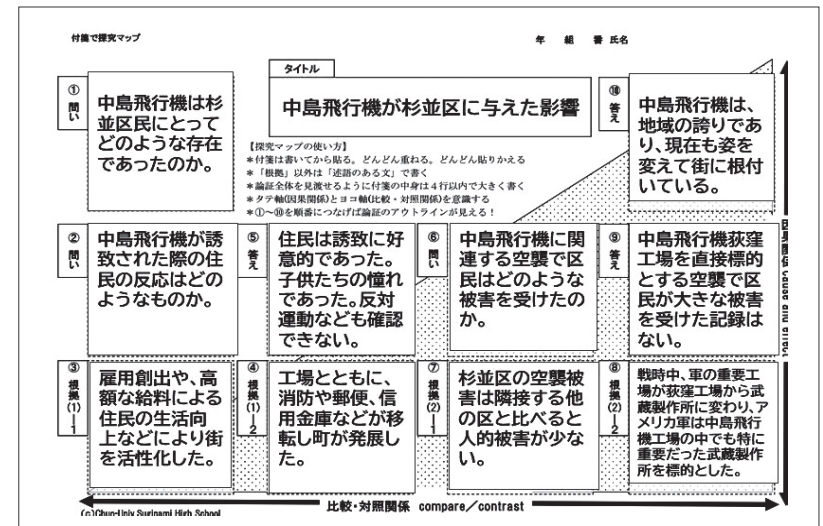
レポートの作成は、国語の授業で使われている「探究マップ」を使用しながら進めた。全体の「大きな問い」に対して仮の答えを立て、その仮説を立証するための「小さな問い」とその答えを集めることで「大きな問い」の根拠としていくというやり方である。今回の内容をマップに当てはめると以下になる。今回は仮説として立てた答えが間違っていた事が分かり、途中で答えを修正し、まとめることとなった。資料7-iは、活動当初のマップである。「中島飛行機は杉並区民にとってどのような存在であったのか。」という大きな問いに対し、「中島飛行機は、戦時中に標的になりやすい軍事施設であるため、懸念の対象となる存在であった。」という仮説を立てた。しかし、調査を進め

るうちに、この仮説が誤っていることが分かり、仮説を修正した。修正したマップが、資料7-iiである。調査を通して、中島飛行機が懸念の対象どころか街に受け入れられ肯定的に捉えられていたということが判明したので、仮説を修正し「中島飛行機は、地域の誇りであり、現在も姿を変えて街に根付いている。」とした。そして、「中島飛行機が誘致された際の住民の反応はどのようなものであったのか」「中島飛行機に関連する空襲で区民はどのような被害を受けたのか。」という2つの具体的な問いを定めた。これらの具体的な問いと答えを根拠に仮説が正しいことを論じた。中島飛行機荻窪工場を直接標的とする空襲で区民が大きな被害を受けた記録はなく、むしろ、中島飛行機が荻窪に誘致されたことによる雇用創出や、高額な給料による住民の生活向上などにより街は活性化され、中島飛行機は子どもたちの憧れとなるほどであったことが分かった。また、現在は自動車工場として姿を変え、街に残り続けている。

資料7-i



資料7-ii



生徒の作成したレポートは、8月上旬に「全国高校生歴史フォーラム」に出品した。夏休みを利用して作成したが、前述のとおり対面での活動が厳しく制限されていたこともあり、思うように進まず期限間近での完成となってしまった。図書館を使った調べる学習コンクールに関しては、夏休み明けから1か月程度猶予がある9月下旬が締切であったので、夏休みに調べた中島飛行機についての歴史を中心に中島飛行機と杉並区がたどった歴史を再度まとめなおし、出品することができた。結果として、歴史フォーラムでは入賞に至らなかったが、図書館を使った調べる学習コンクールでは、杉並区大会奨励賞、全国大会で優良賞を受賞することができた。杉並区大会では、表彰式に保護者同伴で参加することができ、保護者の方から「歴史プロジェクトが生徒の居場所になっている」という趣旨のお話をいただいたことが著者の印象に残っている。



Ⅲ 振り返り

10月のLHRの時間を使用して歴史プロジェクト内で活動報告を行った。生徒の感想を引用しながら、生徒たちにとって今回の活動がどのようなものとなったのかを考えたい。最も印象的だったのは次の感想である。「実際に仮説を立てて資料を探してそこから考察するという一連の流れを体感できてとても楽しかったです。また、中杉の独自の教材である探究マップを使って論文のようなレポートを作ることができてとても勉強になりました！（探究マップのおかげでだいぶスムーズに作ることが出来ました）」様々な学習の根幹となるであろう「問いを立てて諸資料から答えを探る」という活動を体験できたことは生徒の今後の学びに生きてくるのではないかと考える。また、生徒たちは来年度、3年間の集大成として卒業論文を執筆するわけであるが、探究マップを実際に使ってレポートをまとめられたことについては、自信になるとともに、活動を通して見えてきた課題や反省点が財産になるのではないかと考える。（探究マップは、大きな方向性を決め、枠組みをつかむために参考にしたのであって、著者が探究マップを詳細に使いこなせていたわけではない。著者は探究マップについて生徒よりも仕組みを知らなかったの、国語科の大館教諭に仕組みを伺い、大館教諭が執筆した「改めて、〈付箋で探究マップ〉超入門」（2020）『中央大学杉並高校紀要』第30号を参考にさせていただいた。）

次に、歴史プロジェクトで共通の興味・関心を持つ仲間に出会えたことも生徒にとって有意義であったようである。「一つの物事を様々な視点から考察することの大切さを学びました。それはみんなで意見を出し合うグループワークだったからこそ得られた学びであり、一人の活動では得られなかったでしょう。（中略）歴史プロジェクトチームの仲間は僕自身の誇りでもあります。そんなメンバーとこのような活動ができたことに感謝です。」という感想も寄せられた。前述した保護者からの声からも分かるように、「歴史が好きである」という生徒たちがクラスを越えて集まって活動するということ自体、今回のプロジェクト学習がなければ体験できなかったことだと思う。コンクールの入賞のような

直接的な成果に関わらず生徒が関心のある学びを仲間と安心して追求できるという場を設けることに意義があるのではないかと考える。また、歴史プロジェクトのメンバーの中には大学進学後、文学部で歴史を学びたいという生徒が複数いる。歴史プロジェクトを通して、歴史を教わるだけでなく、自分たちで史料を集め、歴史を紐解く楽しさを少しでも感じてもらえたのであれば幸いである。

3. 改善点と今後の展望

本章では歴史プロジェクトの活動を通しての改善点と今後の展望について述べていく。まず、改善点である。

- ①各種コンクールへの参加にプロジェクトメンバー全員で取り組めず、プロジェクト内でのさらに有志メンバーのみでの活動となってしまったこと。
- ②スケジュール管理が甘く、レポート執筆・添削の期間を十分に確保できなかったこと。
- ③オンライン中心の活動に移行してから生徒のモチベーションとグループの活発さを維持できなかったこと。

まず①についてである。元々は歴史プロジェクトメンバー12人全員で、コンクールへの出品を目指したが、活動の中心が夏休みであったため、部活動などに積極的に取り組む生徒にとっては歴史プロジェクトへの参加が難しく、徐々に歴史プロジェクトの活動に出席するメンバーが限られてしまった。そもそも、歴史プロジェクトの活動に、授業時間外でまで活動することを想定していなかった生徒も居るので仕方ない面もあるが、著者の方でチーム編成や活動日の調整、何より部活動が忙しい生徒向けにコンクール以外の活動目標となる別のコンテンツを用意できなかったことが大きな反省である。今後同じように活動できる機会があれば、大きな大会やコンクールに出品するだけでなく、学内でのポス

ターセッションや動画作成など負担の少ないコンテンツも用意し、目的や環境によって生徒が取り組む活動を選択できるようにしたい。意欲が非常に高い一部の生徒が学べる環境ではなく、全員がそれぞれの活動で学びを得られる環境を模索したい。

次に②についてである。今回の活動では、4月に活動が始まり、6月にコンクールのアナウンスをし、主に夏休みを使ってレポート作成に取り組んだ。かなりタイトなスケジュールで、かつ、夏休み中は感染対策で対面での活動が大きく制限されたため、対面での活動時間はほとんど確保できなかった。今回は初めての活動であったため、難しかったが、理想は4月当初から各種コンクールについてアナウンスし、それをより想定した形で活動をできればよかった。さらに言えば、前年の秋頃から活動を進められるとなおよいだろう。筆者が、歴史フォーラムで優秀賞を受賞している学校の教員の方に聞いた話によると、地理歴史研究部のような形で部活動があり、1年をかけて歴史フォーラムの準備をしているということであった。それくらい準備期間が必要であることを念頭に活動し、スケジュール管理をするべきであったと反省している。

次に③についてである。対面での活動が難しかった期間もGoogle MeetやGoogleドキュメントを活用してスムーズに活動を進められた事は良かったが、オンラインでの活動のみで生徒のモチベーションを維持するのは難しかった。モチベーションが下がったわけではないだろうが、対面での活動が続いていた期間と比べて、活動が滞ってしまった。これはモチベーション以外にも、オンラインの活動のみだと進め方が分からなくなった時に気軽に相談したり、質問したりできない事も影響していると考えられる。定期的なビデオ通話やClassroomを通じたやり取りを行ったが、直接会って話を聞いて質問に答えるという時間には敵わなかったように思う。特に、直接相手の顔が見えないメールのやり取りのみで活動を進めるのは困難だと考える。ビデオ通話でのやり取りの時間が充実する工夫し、メンバー同士で刺激し合いながら活動できる機会を増やすことが重要であると考ええる。

最後に今後の展望についてである。歴史プロジェクトでの活動は、今年度で一度終了し、来年度のプロジェクト学習がどのように設定されるかは未定である。しかし、新学習指導要領で求められる探究型学習において、今回の歴史プロジェクトのような生徒の意思によって、生徒が主体的に行う活動は非常に重要になるであろう。本校でも今後始まっていく、「総合的な探究の時間」の中で地歴公民科の教員として、地理や歴史に関心のある生徒が、主体的に学べる場を提供できるように、今回の活動を糧に日々研鑽を積んでいく覚悟である。

また、前述したように、メンバーの生徒達は来年度卒業論文を執筆する。今回の歴史プロジェクトでの一連の経験が、卒業論文をはじめ、生徒達の今後の学びに少しでも生きれば幸いである。

活動が行き詰まった際に何度も助言をいただいた山田教頭や歴史プロジェクトを担当する機会を下さり、コンクールへの参加を勧めて下さった小泉学年主任をはじめ、ご協力いただいた多くの先生方に感謝の意を表したい。